

階級境界構造の考察

都築 一治

1. 問題状況

2000年前後から、階級・階層枠組みの有効性についていくつかの立場から論争が行われている。数でいえば学術論文誌上の論文によるものが多いが、どの論文のreferenceもほぼ共通の文献を載せており、ある限られた研究者の間の論争であることがわかる。その論争に登場する立場を集約したのが、Erik Olin Wrightが編集した*Approaches to Class Analysis* (2005)である。ここには大きく分けて6つのアプローチからそれぞれの階級分析が示されている。その6つとは、①ネオ・マルキスト階級分析、②ネオ・ウェーバーリアン階級分析、③ネオ・デュルケミアン階級分析、④ブルデューの階級分析、⑤rent-based階級分析、⑥ポスト階級分析であり、①はWright、②はBreen、③はGrusky、④はWeininger、⑤はSørensen、⑥はPakulskiが主張者となっている。

このうち①～③までの立場を主張する論者は、いずれも著名な社会階級／階層研究者であることは論を待たない⁽¹⁾。この本の範囲を超えて最近に至るまで論争を繰り返しているのは②と③であり、②の中心的研究者はGoldthorpe (Chan and Goldthorpe 2007a, 2007bなど)、③はGrusky (Grusky 2005, Weeden and Grusky 2005, Grusky and Weeden 2008, Jonsson et al. 2009, Weeden and Grusky 2012)である。彼らの論争の焦点となっているのは、少数の大きな社会的集合としての階級か、個別の職業カテゴリーによる多数の小さな社会的集合としての階級かという問題であり、Grusky and Sørensen (1998)はそれを大きな集合体 (aggregate) レベル、個々の要素に分かれた (disaggregate) 小さな職業レベル、Weeden and Grusky (2005)などは、Big-ClassとMicroclassと呼んでいる。

Chan and Goldthorpe (2007b)はマックス・ヴェーバーの考えに基づいて、労働市場における社会関係から定義される階級と諸個人間相互の優劣関係として定義される社会的地位序列を区分し、それぞれがどのような社会領域の分析に有効であるかを論じて

いる。彼らはいずれの概念にも有効な社会領域があり、両者を適切に使うことが重要だと結論づけている。これにたいして、GruskyらはBig-Classの分析のほうが有効であることを仮説的に主張したあと、大規模データの分析から職業レベルのMicroclassが社会階層現象の分析にとってより有効であることを示してきている(Weeden and Grusky 2005, Grusky and Weeden 2008, Jonsson et.al. 2009, Weeden and Grusky 2012)。

1. 1 Big-ClassかMicroclassか

階級／階層区分については、社会階層研究の早い段階から、経験的な知見に基づいた離散的な職業カテゴリー(SSM8分類など)や連続的な職業尺度(職業威信スコア)などもちいられてきた。多くの場合、このような階級／階層区分が一定の経験的な妥当性をもつことは暗黙の前提とされ、その枠組みのもとに格差や不平等の分析が行われている。そこでは、階級／階層区分の経験的な妥当性そのものが問題とされることは少なかったと言える。しかしその後、ピエール・ブルデュー(1979, 1982)が階級区分にかかわる項目群に関するデータを双対尺度法(=コレスポネンス分析 中井(2006)参照)で少数の次元に縮約し、その上に意味的なまとまりをもつ階級を見出すといったかたちで、経験的な基底構造と仮説的な階級区分の関係をあきらかにする方法を提示するなど、経験的に妥当な階級／階層区分を探求する試みが行われるようになる。

GoldthorpeらとGruskyらの論争は、この延長線上にあると言えるかもしれない。彼らはとくに階級の大きさについて厳しい議論を繰り返している。Featherman-Hauser区分と並んでErikson-Goldthorpe区分は、職業に基づいて社会全体を数個(7~9)の大きな階級に分け、それら階級の違いが社会生活のさまざまな局面に影響をおよぼすことをあきらかにしようとする研究を導いてきている。その階級区分は「経済生活における社会諸関係、とくに雇用に関わる諸関係から導かれたもの」であり、「(1)経済的安全性、(2)経済的安定性、(3)経済的見通し」⁽²⁾などに影響を与えるとされる(Goldthorpe and McKnight 2006: 109)。

これにたいしてGruskyらは個々の職業に固有の階級メカニズム(Occupation-Specific Mechanism)の存在を主張し、100前後(Jonsson et. al. (2009)では82, Weeden and Grusky (2012)などでは126)の細かな職業区分に基づく階級が人びとの不平等状況や階級再生産などをよりよく説明できるとしている。このうち不平等状況の分析でGruskyらは、階級／階層的な不平等に関わるカテゴリー変数群の直積からなる空間—Grusky and Weeden (2008)はこれを「不平等空間」(inequality space)と呼んで(I)人的資質や人的投資、(C)労働状況、(R)報酬の3つ領域に関する変数から構成する—を定義し、この空間構造をよりよく説明する階級モデルを探求しようとする。彼らをはじめ、潜在クラス分析を用いて3つくらいのBig-Classと6つくらいのMicroclassの効果を比較する計画のようであったが(Grusky and Weeden 2006, 2008)、データ分析を

行った論文においては職業分類に基づいた5～10個の大きな階級と82あるいは126の職業小区分の不等空間におよぼす効果を比較している。

そこでもちいられる分析は、あらかじめ設定された顕在的な階級区分が格差や不平等をどれくらい規定しているかをあきらかにしようとするものと、Gruskyらのいう「不平等空間」のようなものの構造を規定する人びとの集まりを見つけ出そうとするものに分けることができる。前者で用いられるのは対数線形分析や多項ロジット分析などであり、後者に用いられるのは多次元尺度法や潜在クラス分析などである。

1. 2 階級境界の問題

理論仮説に基づく顕在的な階級区分を設けて、格差・不平等現象を説明できるかどうかで枠組みの有効性を競うGoldthorpeらvs. Gruskyらの議論では、階級枠組み変動の可能性を必ずしも明示的に扱っているとは言えない。雇用関係を基準に設定されたGoldthorpeの階級区分は、基本的にカテゴリー化の仕方を変えていない。Gruskyらは何十年かの時間経過のなかで大規模階級・小規模階級それぞれのデータへの規定力が変化していることを示しているが、階級区分そのものが組み替えられるわけではない。しかし、人びとのどこに階級境界を引くのか、その境界はどのていど明確なものなのかが常に変化していると考えられるとすれば、モデルのなかに階級境界の可変的性質を組み込んでおくほうがよいだろう。

Wright (2005) は、階級間関係 (class relations) は別種の階級間関係との重なりや権利関係への制度的制約などによって複雑化する可能性のあること、人びとの階級への位置づけ (class locations) は権利関係の拡散、同時・継時に異なる社会的地位に就く可能性、社会的資源の量や家族関係などによって複雑化する可能性のあることなどを示している (Wright 2005: 10-19)。これらの“複雑化”は階級境界をあいまい化する可能性がある。

個々の職業レベルでも、たとえば1970年代の“プログラマー”と現代の“プログラマー”相当の職業群を考えれば、同一職業名にある人びとの状況はかなり異質になっていることがわかる。また、旋盤工やタイピストなどの職業は消滅しつつあり、プログラマーやユーチューバーのような“職業?”が登場しつつある。職業名を核とした小規模階級の境界も明確であったりあいまいであったりしながら、離合集散を繰り返している。

潜在クラス分析は、格差・不平等状況を局所的に同質化するような仮定の集合を導くことができる点で (三輪 2009, 藤原翔・伊藤理史・谷岡謙 2012など参照), あいまい化した状態に最適な階級境界を引くツールとなりうる。実際, Evans and Mills (2000) は, 潜在クラス分析を用いてGoldthorpeの階級枠組みの組み替え可能性を示している。しかし, 因子分析の解がデータの変動に対して敏感に反応するように, 潜在クラス分析の解の同一性も時代変化に対して保たれない可能性がある。また, もし理論があいまいな境

界状況を予想するなら、統計的に最適な境界設定が妥当でないこともあるだろう。

ここでは、理論仮説による顕在的な階級設定でありながら、その階級境界の明瞭さ／あいまいさが可変的なモデルを探るための予備的作業をおこなうことにする。

2. 基本モデル

以上示した階級研究はどのようなものであっても、基本的に人びとをさまざまな形態の集団に分割する枠組みの上に成り立っている。その社会学的な意味を置くとして、単純化すれば、それは人びとの集合の問題である。それが名目的なものであるかリアルなものであるか、大きいか小さいか、分析技法上の潜在クラスか職業名をもとにした顕在クラスなのか、などの違いはあるが、いずれも通常の意味での集合—すなわち要素（ここでは個人）が集合に含まれるか含まれないかのいずれかであるようなものである—が想定されている⁽³⁾。

ところで、われわれはかつて階層をファジイ集合として記述する方法について論じていた（都築 2004）。その定式化は以下のとおりである。

まず、人びとの階層所属を決める属性の集合を、 $A = \{a_1, a_2, \dots, a_L\}$ 、個人 i の属性プロフィールを $p_i = \{a_{i1}, a_{i2}, \dots, a_{iL}\}$ であらわし、各個人を属性プロフィールで代表されるものと考えて、これら人びとの集合を $P = \{p_1, p_2, \dots, p_N\}$ とする。

ここで、 P を全体集合とする K 個のファジイ集合 X_1, X_2, \dots, X_K を考える。このとき、メンバーシップ関数 $\mu_{X_k}(p_i) = f_k(a_{i1}, a_{i2}, \dots, a_{iL})$ ($k=1, 2, \dots, K$) となるような関数 f_k があって、これが適切に支配者・服従者を識別するとき、 X_1, X_2, \dots, X_K をファジイ的な準階層と呼ぶことにする。（都築 2004：15 一部を追加・修正）

ここで“準階層”はこの論文独特の概念化による階層を指しているが、この部分を無視すれば、集合としての階級をファジイ化したものと言える。たとえば階級数を2つだけとして、それぞれを X_1, X_2 と表記し、社会の個人全体の集合 P の上にこれら2つのファジイ部分集合を定義する。 P の要素を p_i とあらわす ($i=1, 2, \dots, N$)。2つのファジイ部分集合は、それぞれメンバーシップ関数 $\mu_{X_1}(p_i)$ 、 $\mu_{X_2}(p_i)$ で特徴づけられる。社会はこの2つの部分集合とそれぞれの補集合から構成され、すべての個人はそれぞれに何らかのいでどで帰属する。人びとの帰属は必ずしも排他的ではないので、この2つの集合には重なりがありうる。その意味で、通常の階級がたがいに排他的区分であるのとは異なっているが、人びとの階級帰属のあいまいさを組み込んでいるので、ただちに（資本家が同時に労働者であるような）問題を生じるわけではない（資本家的な労働者や労働者的な資本家は想定する）。

2. 1 階級境界のあいまいさ

次に水本雅晴 (1988) により, これら 2つのファジイ集合の境界のあいまいさをファジイエントロピーで定義しよう。水本の記述とは, 一部の記号などを変更している。また, 使用される記号は上で示したものと重なっている部分があるが, 記号法は基本的に別である。

集合 A のファジイエントロピー $d(A)$ は以下で定義される。

$$d(A) = H(A) + H(\bar{A})$$

$$\text{ここで, } H(A) = -K \sum_{i=1}^N \mu_A(p_i) \cdot \log_2 \mu_A(p_i)$$

(K は正の定数, K はファジイ準階層の定義にもあらわれるが別のもの)

これは, 次のようにも書くことができる (水本 1988 : 120)。

$$d(A) = K \sum_{i=1}^N S(\mu_A(p_i))$$

$$(S \text{ はシャノン関数 } S(x) = -x \cdot \log_2 x - (1-x) \cdot \log_2 (1-x))$$

さらに $K=1/N$ と置くと, 正規化ファジイエントロピー $v(A)$ が得られ, その値の範囲は $0 \leq v(A) \leq 1$ となる。 $v(A)$ が 0 のときはすべての要素がグレード 0 か 1 で集合 A に帰属し, $v(A)$ が 1 のときは, A のすべての要素のグレードは 0.5 となって, A と \bar{A} に半々に帰属することになる。

$$v(A) = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^N S(\mu_A(p_i)) \quad (\text{水本 1988 : 121})$$

われわれは人びとの属性プロフィールのまとまりの上にファジイ階級を定義しているので, 正規化ファジイエントロピー $v(A)$ は, 階級・階層現象にかかわる個人属性の凝集性 (階級内同質性と階級間異質性) を反映するものと考えることができる。この値が小さい (集合があいまいでない) ということは, ファジイ階級 A が明確な個人属性による境界をもつことを意味し, 社会現象にたいして何らかのまとまった単位として働いている可能性を示唆する。反対に $v(A)$ が大きい (集合があいまいである) ことは, 集合 A と背景となる補集合との違いが不明確なることを意味し, 階級境界の融解と呼べるような事態に対応する。

階級境界の明確化/不明確化は, 上の記号法で分かるように集合 A のみの特性として定義されており, 同時に存在する A 以外の集合の階級境界の状態とは独立である。したがって, ある階級は明確な輪郭をもたないが, 別の階級ははっきりした輪郭をもつというような状況を記述することもできる。

2. 2 職業名を核とするマイクロファジ階級

このような準備のもとに、社会全体を7~8個の境界のあいまいな大きなファジ階級によってモデル化することができる。しかし、すでに述べたように、どのような基準によって階級を定義するかは論者のよって考え方が異なる。われわれは以前の研究で示したように、階級・階層を社会全体の権力構造を反映したものとして仮構している。この場合でも、職業的地位は権力関係に関わる基本的な属性であると仮定しているので、もしGruskyらが言うように個々の職業に固有の階級メカニズムがあるのだとすれば、100以上の職業名を核とするマイクロファジ階級を定義する必要があるかもしれない。そこで、職業名を核とするマイクロファジ階級を以下のように定義する。

M個の職業名が存在し、個人*i*が職業*m* ($m=1, 2, \dots, M$)に就いているという属性を a_{im} とあらわす。また、個人*i*の階級・階層的特徴をあらわすその他の属性プロフィールを $p_i = \{a_{i1}, a_{i2}, \dots, a_{iM}\}$ と表記する。このとき、職業*m*を核とするマイクロファジ階級 O_m ($m=1, 2, \dots, M$)を、次のように定義する。

もし個人*i*が属性 a_m をもたない（職業*m*に就いていない）なら、

$$\text{職業名を核とするファジ階級 } O_m \text{ のメンバーシップ関数 } \mu_{O_m}(p_i) = 0$$

もし個人*i*が属性 a_m をもつ（職業*m*に就いている）なら、

$$\text{職業名を核とするファジ階級 } O_m \text{ のメンバーシップ関数 } \mu_{O_m}(p_i) \geq 0.5$$

個人が職業カテゴリー*m*に該当しないなら、ほかにもどのような属性をもっている職業カテゴリー*m*を核とするマイクロファジ階級 O_m に属することはなく、個人が職業カテゴリー*m*に該当するなら、少なくとも \bar{O}_m よりも O_m に属する度合いが大きい。グレードが0.5以上であることが、そこに何らかの凝集的なまとまりがあることを意味している。

ここでも個々のマイクロファジ階級境界はあいまいでありうるが、 O_m の正規化ファジエントロピーを社会の全構成員数*N*人について計算すると、職業*m*に就いていない人びとがその値を引き下げるので、階級境界のあいまいさが0に近づいてしまう。そのため、マイクロファジ階級境界のあいまいさは、当該職業*m*に就いている人のみで計算する。

職業名*m*に就いている人の数を N_m 人とあらわすと、マイクロファジ階級 O_m の境界のあいまいさを以下の式で定義する。

$$v(O_m) = \frac{1}{N_m} \sum_{i=1}^{N_m} S(\mu_{O_m}(p_i))$$

職業*m*に就いている人の O_m のグレードがすべて1.0なら $v(O_m)$ は0になり、すべて0.5

なら $v(O_m)$ は1となる。

3. 階級構造の変化

Wright (2005b)「答えが“階級”なら、その問いは何？」では、問題に応じていろいろな階級のとらえかたがありうることを示唆している。Chan and Goldthorpe(2007)もヴェーバーの用法による階級と地位の2つの概念は、それぞれに有効な社会領域があることを示している。また、Grusky (2005), Jonsson et.al. (2009)は国や地域によって、Weeden and Grusky (2012)は時点によってBig-ClassとMicroclassの働きが異なることを仮定している。

このように階級概念の有効性は、その置かれた文脈によって変化すると考えられている。しかし、どのように定義された階級であっても、それが人びとの集合である点で変わらないとしたら、上に述べたような変異を人びとの集合の可変的な差異として記述できるかもしれない。

ただ、互いに排他的かつ網羅的に定義された通常の意味での集合としての階級では、その変異は、どのような人びとをその要素とするかという点で表現するしかない。したがって、BigかMicroか、雇用関係による分類としての階級か人びとの相対的な優劣関係としての地位かということが争われている。しかし先に定義したような、必ずしも互いに排他的でない境界の不明な集合としての階級であれば、階級境界の状態の違いによる記述の自由度が付け加わる。

3. 1 大規模階級と職業を核とした小規模階級の相互作用

現代においても、格差・不平等現象に関わる階級は職業をベースとしていると考えられる。それは、立場は違っても、多くの論者に共通する考えといえるだろう⁽⁴⁾。ある見方からカテゴリー化された職業群に就いた人びとの集まり(大規模階級)とそのカテゴリーに属する個々の職業に就いた人の集まり(小規模階級)は、通常、前者が後者を包含する関係にあるとして概念化されている。しかし、実際には同じ職業名で呼ばれる人びとの間にも異質性がありうるし、それにとまって大規模階級どうしにも重なり合いがありうる。

上の例は、大規模階級の状態が小規模階級の状態に依存していることを意味しているが、反対に小規模階級状況が大規模階級状態に影響されることがあるかもしれない。ここで、大規模・小規模階級それぞれの状態はたがいの状態に相互依存的にあるとしよう。このとき、大きな社会的集合としての階級(X)と職業名を核としたカテゴリー(O)との関係は、次のように図式化できる。

2つの集合は、たがいの状態に影響を与えている。職業間の経済的関係が階級構造の

基盤となることもあれば、階級構造が職業の分化に影響を与えることもある。またそれぞれの集合は、その環境 (Eo, Ex) からの影響を受け、環境どうしは相互に関係をもっている。

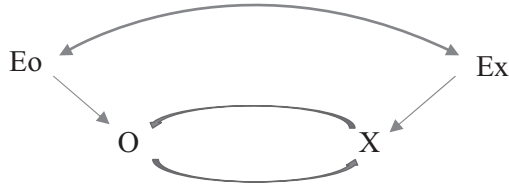


図1. 大きな階級と職業を核とする小さな階級の関係

たとえば、技術革新 (Eo) によってあたらしい職業カテゴリー (O) が登場すると、それは全体社会の権力構造 (X) を変化させうる。IT企業の経営者が経済団体の有力な構成員になるというような場合である。また、たとえば教育インフレーション (Ex) は学歴の価値を下げ、学歴区分による権力構造 (X) を変化させる。そのことは職業ごとの学歴構成に影響を与え、職業の社会的位置づけ (O) を変化させうる。グレーカラー職の登場などが、これにあてはまるかもしれない。さらに、技術革新 (Eo) と教育インフレーション (Ex) は、ともに社会全体の情報化の趨勢に結びついていると言えるだろう。

3. 2 階級境界状況のパターン

大規模階級と小規模階級、階級境界が明確かあいまいかを組み合わせれば4つのパターンになることがわかる (図2)。図2の外側の楕円は大規模階級、内部の円は小規模階級をあらわし、実線は境界が明確なことを、破線は境界があいまいなことをあらわしている。同じようなパターン化はGrusky (2005) などにあり、Big-Class, Microclassともに強いのはスウェーデン、Big-Classは強く、Microclassが弱いのはドイツ、Big-Classは弱く、Microclassが強いのはアメリカ、Big-Class, Microclassとも弱いのは日本などと分類されている。

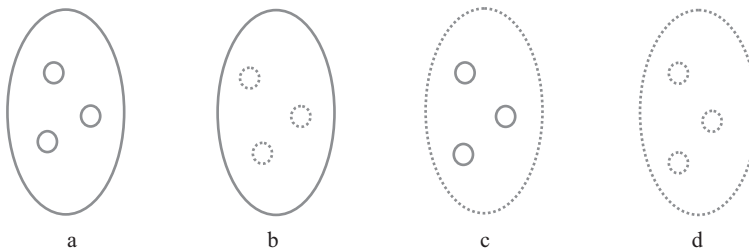


図2. 大規模階級と小規模階級の境界パターン

われわれのパターン化がGruskyらと異なるのは、階級メカニズム作動の強弱を階級境界のあいまいさと明示的に結びつけている点である。人びとの集まりを明確に輪郭づけるような境界は人びとの意識や行動に影響し、人びとが意識や行動を共有するところは明確な境界で囲われる。その度合いを記述する尺度を提示することで、より厳密な理論仮説の構築が可能となっている。

3. 3 境界変動過程のシナリオ

散文的ではあるが、たとえば次のような記述が可能である。日本の1950年代からの変動を考えると、おおむね次のように推移したのではないかと想像される。まず、50年代から60年代にかけてはaのようなパターンで、各職業を核とした集団の凝集性も高く、マルクスの階級意識を背景にもつような階級の規定力が大きかった。60年代から70年代には、急速な産業技術の高度化の結果、旧来の職業集団の凝集性は低下し、bパターンに移行する。その後、70年代から80年代にかけては大きな階級の存在も希薄化し、dのような状態で、階級・階層の規定力は全体的に低下する。しかし、80年代から90年代、さらに2000年代にかけては再び職業を核とする構造が顕在化してマイクロクラス化が進み(d→c)、さらに2000年代から現在にかけてはビッグクラスも復活してくる(c→a)。産業構造の変動によって職業秩序が揺らぎ、階級・階層構造がいったん融解してから、再構造化したというシナリオである。

ここで階級境界のあいまいさは、ファジィ階級のメンバーシップ関数によって与えられている。したがって、あいまいさの変化はメンバーシップ関数の値(グレード)の変化の結果なのだが、グレードの変化に影響を与えるものを大きく2つに分けて考えることができる。

ひとつは、人びとの属性プロフィールの変化である。入力が変われば、出力が変わる。たとえば、大卒の学歴をもつ人のほとんどがホワイトカラーの職業に就いている場合、学歴と職業の2つの属性値の組合せは中流階級への高い帰属を帰結するかもしれない。しかし、大卒であってもかならずしもホワイトカラー職に就かないことが一般的になれば、たとえ大卒ホワイトカラーであっても中流階級に帰属しているとは言えなくなるかもしれない。

グレードに影響を与える第2の要因は、メンバーシップ関数そのもののかたちの変化である。同じ入力でも、関数形が変われば出力は異なる。たとえば、中流階級への帰属が生まれや育ちといった帰属主義的な要因によるのではなく、能力や実績といった業績主義的な要因によって決まるようになるとすれば、かつては中流階級であった人が、今や同じ階級の人間ではなくなることがありうる。

同じ職業名であっても、その職業名にある人の異質性が増加して境界があいまい化するの前者の要因によるものであり、そのような職業が分裂していくつかの等質な別の

職業群になるとすれば、そのときは後者のメカニズムが働いたと言えるかもしれない。また、地位の非一貫性が増大して中間層が増大するのは前者のメカニズム、非正規雇用のような形態が広まることで二極化が進むのはメンバーシップ関数の変化なのかもしれない。

4. 結語

ここで示したファジイ階級を実証的に特定するには、たとえば、ファジイ判別分析のようなものを利用するとよいかもしれない（和多田順三ほか（1983）、Pop and Sarbu（2013））。Goldthorpeの階級区分をグループ化基準にとって諸種の属性から判別関数を導くといった方法が想定されるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

ただし、たとえ何らかの分析技法によって集合としての階級・階層が特定されたとしても、それは時系列の断面をとらえたものにすぎない。すくなくとも、これまで定義されたり、データから導かれたりされてきたものから、その性格を拭うことは難しい。しかし、ここで主張したかったことは、職業や階級といった枠組みの時間経過にたいする不安定さであり、流れのなかの泡のような性質である。そうした枠組みを構造化する強い力学があったとしても、その力学は静的な構造を維持するのではなく、状況に合わせて枠組み構造を変化させるだろう。

もしこのような見方が正しいとすれば、固定的な枠組み構造しか記述できない言語系では、そのようなメカニズムをとらえることはできない。ここでは階級境界をあいまい化することで、時系列でその状況を連続的に変化させる可能性を開こうとした。ただ、おそらく時間経過にたいする枠組みの流動化は、階級・階層だけでなく、およそ社会科学のあらゆる概念にたいして必要なだろう。

かつてゲオルク・ジンメルが、「社会（Gesellschaft）と言うより、社会化（Vergesellschaftung）と言うべき」と述べ、その動的プロセスのパターンとして“形式”を記述したように、社会はつねに変化する相にあって、そこで観察される実体は、次の時点には同じものとしては存在しない。しかし、そうした変化はただランダムに起こるのではなく、観察のスケールを広げれば、そこに一定の規則性が見いだせる。このようなアプローチで分析を進めようとするなら、概念に時間変化を付け加える“時間化”は最小限の理論的要請だと考えられるからである。

付記 本稿は文部科学省研究費補助金・挑戦的萌芽研究（H26～H28）「知識基盤社会における職業活動の持続可能性に関する研究」の助成による研究成果の一部である。

注

- (1) ⑥のPakulskiは1996年に*The Death of Class*というタイトルの書籍を共著で出しており、階級分析が今や無効であることを強く主張する論者である。⑤のSorensenはよく知られた社会階層研究者であるが、このなかで彼のアプローチはやや特殊である。④のWeiningerについては、残念ながら、われわれはよくわからない。
- (2) (1)経済的安全性は失業のリスク、(2)経済的安定性は所得の安定性や変動、(3)経済的見通し(prospect)は年齢と所得水準との関係などを指している。
- (3) ただし潜在クラス分析は、人びとが潜在クラスに所属する確率を組み込んだモデルである。
- (4) 吉川(2009)第3章「階級・階層の「不都合な真実」」のように、このような考えに疑問を呈する議論もある。

文献

- Bourdieu, Pierre 1979,1982. *La Distinction Critique Sociale du Jugement*, Minuit (=1990 石井洋二郎訳『ディスタクシオン I・II』藤原書店)
- Chan, Tak Wing and John H. Goldthorpe 2007a. "Social Status and Newspaper Readership.", *American Journal of Sociology*, Vol.112, No.4, January: 1095-1134.
- Chan, Tak Wing and John H. Goldthorpe 2007b. "Class and Status: The Conceptual Distinction and its Empirical Relevance.", *American Sociological Review*, Vol.72, August:512-532
- 藤原翔・伊藤理史・谷岡謙 2012.「潜在クラス分析を用いた計量社会学的アプローチ—地位の非一貫性、格差意識、権威主義的伝統主義を例に一」『年報人間科学』第33号：43-68
- Goldthorpe, John H. and Abigail McKnight 2006. "The Economic Basis of Social Class", in Morgan, Stephen L., David B. Grusky and Gary S Fields eds. *Mobility and Inequality: Frontiers of Research in Sociology and Economics*, Stanford University Press, Stanford, California: 109-136.
- Grusky, David B. 2005. "Foundations of a neo-Durkheimian clas analysis", in Wright Erik Olin ed. 2005. *Approaches to Class Analysis*, Cambridge University Press, Cambridge, New York: 51-81.
- Grusky, David B. and Jesper B. Sorensen 1998. "Can Class Analysis Be Salvaged?", *American Journal of Sociology*, Vol.103, No.5, March: 1187-1234.
- Grusky, David B and Kim A. Weeden 2006. "Does the Sociological Approach to Studying Social Mobility Have a Future?", In Morgan, Stephen L., David B. Grusky and Gary S Fields eds. *Mobility and Inequality: Frontiers of Research in Sociology and Economics*, Stanford University Press, Stanford, California: 85-108.
- 2008. "Are There Social Classes? A Framework for Testing Sociology's Favorite Concept", Lareau, Annette and Dalton Conley eds. *Social Class: How Does It Works*, Russell Sage Foundation, New York: Chapter 2:65-89
- Jonsson, Jan O., David B Grusky, Matthew Di Carlo, Reinhard Pollak and Mary C. Brinton 2009. "Microclass Mobility: Social Reproduction in Four Countries.", *American Journal of Sociology*, Vol.114, No.4, January: 977-1036

- 吉川徹 2009.『学歴分断社会』ちくま新書
- Kingston, Paul W. 2000. *The Classless Society*, Stanford University Press, Stanford, California
- 三輪哲 2009.「計量社会学ワンステップアップ講座（3）潜在クラスモデル入門」『理論と方法』Vol.24, No.2: 345-356
- 水本雅晴 1988.「ファジイ理論とその応用」サイエンス社
- Moller, Stephanie, Arthur S. Alderson and Francois Nielsen 2009. "Changing Patterns of Income Inequality in U. S. Counties, 1970-2000.", *American Journal of Sociology*, Vol.114, No.4, January: 1037-1101
- Mouw, Ted and Arne L. Kalleberg 2010. "Occupations and the Structure of Wage Inequality 1980s to 2000s.", *American Sociological Review*, 75 (3): 402-431
- 中井美樹 2006.「複数のカテゴリー変数の類似性を検討する:双対尺度法と数量化理論Ⅲ類一趣味と文化的慣習行動」与謝野有紀ほか編『社会の見方、測り方』勁草書房
- Pakulski Jan and Malcolm Waters, 1996. *The Death of Class*, Sage Publications, London, Thousand Oaks, New Delhi
- Petev, Ivaylo D. 2013. "The Association of Social Class and Lifestyles: Persistence in American Sociability, 1974 to 2010.", *American Sociological Review*, 78 (4): 633-661
- Pop, Horia F. and Costel Sarbu 2013. "A New Fuzzy Discriminant Analysis Method.", *MATCH Communication in Mathematical and in Computer Chemistry* 69: 391-412.
- 都築一治 2004.「準階層とその構成に関する仮説的検討」流通経済大学社会学部論叢 Vol.15, No.1: 1-20
- 和多田順三, 本並薫, 田中英夫, 浅居嘉代治 1983.「ファジイ判別分析」『日本経営工学会誌』Vol.34, No.2: 126-131 (Nii-Electronic Library Service)
- Weeden, Kim A. and David B. Grusky 2005. "The Case for a New Class Map.", *American Journal of Sociology*, Vol.111, No.1, July: 141-212.
- 2012. The Three Worlds of Inequality, *American Journal of Sociology*, Vol.117, No.6, May: 1723-1785.
- Wright Erik Olin ed. 2005. *Approaches to Class Analysis*, Cambridge University Press, Cambridge, New York
- Wright Erik Olin 2005a. "Foundations of a neo-Marxist class analysis", in Wright Erik Olin ed. *Approaches to Class Analysis*, Cambridge University Press, Cambridge, New York: 4-30.
- 2005b. "Conclusion: If "class" is the answer, what is the question?", in Wright Erik Olin ed. 2005. *Approaches to Class Analysis*, Cambridge University Press, Cambridge, New York: 180-192.